

図書だより

第48号

平成21年2月1日

呉工業高等専門学校

図書委員会

<http://www.lib.kure-nct.ac.jp/>



目次

豊島大橋*

・巻頭文 図書館改修の必要性	図書館長 野原 稔	2
・第5回 校内読書感想文コンクール優秀賞		
『風に舞いあがるビニールシート』(森 絵都 著)	C 1 中野 智恵美	3
『エイジ』(重松 清 著)	M 2 宮川 慎吾	4
『あした笑顔になあれ』(水谷 修 著)	C 3 数実 浩佑	5
・留学生が紹介する外国の図書館	M 3 アミルル	6
	E 3 チェン	6
・ブックハンティング ブックハンティングについて	A 4 梅比良 友美	7
・行事報告 第6回呉高専文化セミナー	図書館長補 寺岡 勝	7
・新任教員の随想		
『本を読めとは言わない』	一般科目(国語) 岩城 裕之	8
『読書は苦手という方へ』	一般科目(数学) 山内 貴光	9
『私の読書歴』	一般科目(数学) 原本 博史	10
『人生を変えた一冊』	機械工学科 高津 康幸	11
『本と出会い』	建築学科 下倉 玲子	12
・新着図書6選		
『アドバンス物理A2』	一般科目(物理) 笠井 聖二	13
『あさきゆめみし』	一般科目(国語) 小助川 元太	13
『流れの可視化入門』	機械工学科 高津 康幸	14
『通信工学通論』	電気情報工学科 黒木 太司	14
『ミトコンドリアが進化を決めた』	環境都市工学科 及川 栄作	15
『ル・コルビュジェ 事典』	建築学科 寺岡 勝	15
・図書貸出し回数上位8, お知らせ, 編集後記	図書館	16

* 呉市の豊島大橋が11月18日に開通した。豊島大橋は、安芸灘諸島連絡架橋の七つ目の橋で、上蒲刈島と豊島を結び全長932mある。

図書館改修の必要性

図書館長

機械工学科

野原 稔

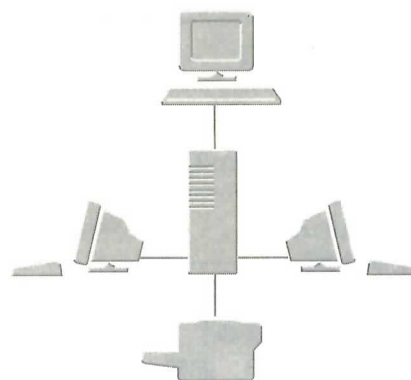


2008年11月21日、2年に一度の割合で開催される中国四国図書館長会議に初めて参加させていただいた。中国四国14高専の図書館長の集まる中、各高専の図書館に関する諸問題が議題となったが、その議題の一つに図書館の改修に関するものがあった。本校においても、何年も前に図書館の改修の要望が行われたが改修の実現はなく、現在も毎年、改修の要望を行っている。他高専においても改修の要望を行っているが、実現していないとのことであった。また、ある館長が改修の実現した所があると聞き、そこを訪問したそうであるが、そこは図書館ではなく、まるで美術館のようであったと述べられた。また、別件で改修の予算がついたので、図書館もこれとっしょに改修を行ってもらったとかで、よほどの案件でない限り、図書館の改修は難しいとの意見が多く出された。

世の中の情報化の流れは速く、インターネットを介して色々な情報を得ることができる現在、図書館もこの流れに遅れをとることのないようにしたいものである。

調べたい事がある場合、インターネットを介し

て調べればたいいの事はすぐに調べることができる。しかし、論理だって調べたいときは、印刷物になっている本が欲しい。図書館に行ってすぐに本を借りることができればありがたい。現在、高専の図書館は、法人化によって全国の55高専が、長岡高専をハブとして順次、結ばれつつある。各高専のホームページより図書館に入り、図書館蔵書検索システム（オーパック）を使用して全国の図書館の本を検索できるようになっている。ただ、見つけた本の貸出しは、図書館の事務を通じて申込みが必要があり、時間を要するため、あまり現実的ではないように思われる。キャンパスの離れている大学等においては、オーパックを使用して本を検索し、インターネットを介して本のある図書館に本の申込みを行う。申込んだ本は宅配業者との契約により、2日程度で申込んだ人のいる図書館に、本が届くというシステムの運用を行っているそうである。高専間においても、是非このようなシステムが構築されることを期待したい。また、これらを実現するためには、学内の理解と協力が必要となることは言うまでもない。



第5回 校内読書感想文コンクール優秀賞

1年生の部

風に舞いあがるビニールシート

森 絵都 著

環境都市工学科1年

中野 智恵美

人、特に豊かな国に暮らしている人ほど、今の幸せに気付かず、無いものを欲しがるとして、私もその一人であるのだ。

世界には、満足に食事もとれず、いつ爆弾が落ちてきてもおかしくない、それこそ生きるか死ぬかという地域で暮らす人々がいる。私たちがその人たちのことをかわいそうだと思います、募金をして、いつの間にか忘れてしまい、自分のことばかり考えてしまう。そう、どんなに悲惨であろうともそれは他人事なのである。頭では、そういう人々がいると知りながらも自分のことを考えるのである。

この本にも、そんな一人の女性が登場する。里佳は、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）に勤める職員である。UNHCRで出会った里佳とエドが結婚。しかし、エドは難民保護のため危険地域へと赴き、年に数日しか帰国できないのだ。里佳は、エドの怪我や病氣、死の知らせがいつ舞い込むかもしれないという恐怖の中に置かれるのだ。ついにその不安に耐えられなくなった里佳はエドに東京の事務所で勤務してくれるよう頼む。しかし、エドは里佳にフィールド勤務をしてほしい。話し合いは平行線のまま、二人は離婚。

はたから見れば、救える命は救いたいというエドの意見が正しいと言える。それは里佳もわかっているはずだ。では、何故そうしないのか。答えは簡単だ。自分の身を危険にさらしてまで助けようとは思えないからだ。そうすれば良いとわかっているとしても実行することは難しい。たいていの人には、何を言っても自分の身がかわいなのだ。だから私には、里佳を責めることはできない。

世の中に、エドのような志を持ち、実際に行動

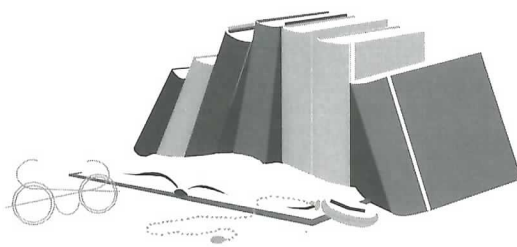
している人はどのくらいいるのだろうか。ほんのわずか一握りの人たちである。私達は彼らに危険を押しつけ、結局は見えて見ぬふりをしているだけなのである。

「ビニールシートのように軽々と吹き飛ばされる幸せが、人の命がフィールドにはある。日本にいる限り、どんな風も命までは奪わない。帰る場所を失うことも、家族を殺されることもない。好きなものを食べ、温かいベッドで眠ることができる。それをフィールドでは幸せと呼ぶ。」とエドは言う。

この言葉は、私の心に深く突き刺さった。私達は今ある幸せに気付くことなく、当たり前のものだと思っている。しかし、それは大きな間違いなのである。ビニールシートが飛ばされて初めて気が付く幸せ。それではいけないのだ。飛ばされていく前に気づき、大切にすべきなのだ。

私達には、無いものを欲しがるとして前にすることがある。このことを、この本は教えてくれた。

今ある幸せに気づき、それを大事に守り抜くことで、新たな幸せが生まれてくるのではないかというのが私の結論だ。幸せのビニールシートを大地にしっかり留めていきたい。



エイジ

重松 清 著

機械工学科2年
宮川 慎吾

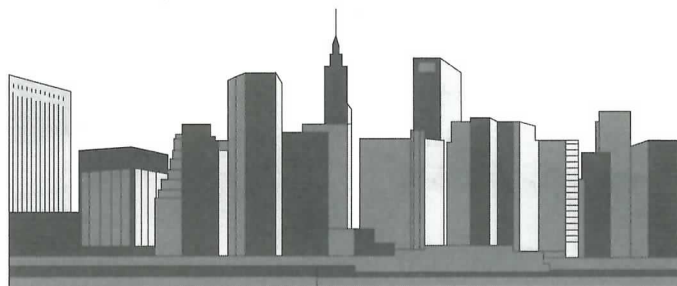
中学生は子供の終わりであり、大人の始まり、体はどんどん成長し、感性も鋭くなる。精神は不安定になる。感じたことを言葉にすることができないこともある。だから、いらだちが積み上げる。

この本は、人生で一番不機嫌な時代である中学二年生が主人公だ。名前はエイジ。夏に町で連続通り魔事件が発生した。犯行は次第にエスカレートし、ついに捕まった。犯人はエイジの同級生で同じクラス。しかも、目の前の席。

近年、少年犯罪が多発している。すなわち「キレて」しまう少年達が多くなってきたということだ。『エイジ』でも、捕まった犯人はごく普通の生徒で、クラスでは目立っていなかった。「フツウ」な方がストレスを溜め込んでしまい、爆発してしまう。よくテレビで、「あの子は普通だったのに」と言う人がいる。「だったのに」ではなく、本人は無理をして「フツウ」を演じていたのかもしれない。だから、我慢の紐が切れた。エイジは加害者となった同級生に自分を同化させようとした。どうして通り魔なんかになっちゃったんだろう。こう思いながら、夜道を歩く人の背後からスピードを出して自転車で迫った。このようなシュミレーションをし、我慢の紐が切れる寸前を確かめた。これを繰り返すうちに、好きでもないガールフレンドに「幻のナイフ」で背中を刺した。エイジはこの衝動を「その気」と呼んでいる。昔から誰にでもあるのではないか。「幻の拳」で生意気な奴を殴る。コ

ンビニでたむろしているヤンキーに「幻の足」で蹴りを入れる。実行にうつすと犯罪であり、大変なことだとわかっているからしない。中学生、とくに二年生は「その気」を開放するキッカケとなる我慢の紐が細いのだ。年を重ねるごとに太くなる。この物語で通り魔となった少年は、たまたまその紐が切れただけのこと。何かの拍子にプツンと。誰かに自分の悩みを相談すると太くなって、逆に自分一人で抱えこんでしまう人は細くなっていく。溶けるようにどんどんひ弱になる。いつ切れてもおかしくない状態。現在も問題になっている苛めは、加害者が被害者の紐を刃物のようなもので削っている。それで言葉等で洗脳されて自分でどんどん追い詰める。紐は溶けていく。そういう悪循環がいつもどこかで起きていることが悔しくてたまらない。最近、兄の先輩の友達が自殺した。会ったこともないし、見たこともないけれど、悔しい。なぜか息苦しくなる。誰か周りにその人の支えになる人がいなかったのか。もしかしたら、周りの人はその紐が少しずつ溶けていっていたのに、気付かなかったのかもしれない。余計悔しい。どうして助けられなかったのか。

若者の自殺、他殺。理由もなく死ぬわけがない。殺すわけがない。誰か周りの人間が、一人でもいいから気付いてやって欲しい。紐が糸になり、糸が切れる前に。近年、少年犯罪が多発しているのは、そういう人が少ないからではないか。



あした笑顔になあれ

水谷 修 著

環境都市工学科3年
数実 浩佑

今、ニュースで少年非行や少年犯罪が多く報道されている。この本の著者である水谷さんはさまざまな問題を起こす彼ら彼女らのことを、「夜眠らない子どもたち」と呼んでいる。私と同世代の人たちが殺人未遂を犯した、薬物を乱用したと聞くことも少なくない。同世代の人が問題を起こしたとニュースに出るたびに不思議に思い、悪い人たちだと思っていたが、原因は子どもばかりにあるわけではなかった。夜眠らないようになった背景があるのだ。

水谷さんは少年非行の原因の一つに、今の私たちの社会の攻撃性を指摘している。つまり、人と人が責め合う社会である。会社では上司が部下を責め、家庭では部下である夫がその妻を責め、妻がその子どもを責めるというのはよくあることだろう。大人である夫や妻はお金やお酒の力を借りて気をまぎらわせることができる。しかし、子どもはそういった方法をとることはできない。息抜きができずに、学校でも家庭でも追いつめられる状況にあったらどうなるだろうか。こう考えると、悪いのは問題を起こした子どもだと決めつけるのはよくない。このような社会にも問題があるだろう。私もそのような状況におかれると、悩みをかかえてしまって問題を起こさないとは自信をもって言えない。

また、攻撃的な社会はリストカットなどの自傷行為を生んだ。責められたことによってできたイライラをいじめや犯罪に解決しようとする子どももいる。しかし、そのような悪いことができない心の優しい子は責められるのは自分が悪いからと考え、自傷行為をし、引きこもってしまう。引きこもりの専門家は130万人ほどの引きこもりがいると推定している。これは130万人の働く人がいなくなるともとれるので、日本の経済にも大

きな影響を与えるだろう。

この攻撃的な社会を変えていくにはどうしたらよいだろうか。変えていくためには責め合うのではなく、人と人が認めていくことが必要だと思う。少年非行、少年犯罪に限らず、いじめ、さらには国どうしの宗教戦争などは、相手を認められないからというのが原因にあるだろう。たしかに、相手が失敗したり、自分と意見が合わなかったりすると責めたくなる気持ちも出てくる。しかし、人間だから失敗しない人はいないし、意見が衝突することはよくあることだ。そんなとき、失敗した人に、「大丈夫だよ。次はできる。」などと声をかけることができたらどうだろう。自分の主張を反対されたときにすぐに否定するのではなく、相手の意見にも耳を傾けながら話し合うことができたらどうだろうか。相手を責めるのは簡単だが、お互いが嫌な思いをしてしまい、荒んだ心を持つ人ができてしまう。それに比べて、相手を認めると悲しい思いをする人はでてこない。少年非行、少年犯罪をする人が持つ、荒んだ心は生まれまいだろう。

認め合う社会と責め合う社会、どちらに住みたいかと聞かれて、後者を選ぶ人はまずいないと思う。人を認めるためのキーワードとして「いいんだよ」がある。水谷さんは間違っただけのことをして悩む子どもに必ずこう言うそう。この言葉は失敗した人だけにではなく誰かと対立したときにも、「そういう考えもあるな」と相手を認めようとするときに役立つ。

今までは他人を責める気持ちが多かった気がする。そんな自分を変えるために、「いいんだよ」という言葉をいつも心に留めておきたい。それが自分を認めてもらうこと、そして認め合う社会の実現につながると思う。

留学生が紹介する外国の図書館 1

図書館の紹介

機械工学科 3年

アミルル



私はマレーシアから来たアミルルと言います。マレーシアは東南アジアにあり、シンガポールやタイに隣接しています。これから私がマレーシアの首都クアラルンプールで利用している図書館を紹介します。

私がマレーシアで最も利用した図書館は大学の図書館だと思います。日曜日以外の午前7時から午後7時頃まで利用することができます。図書館を利用する時は、図書館に登録し、スマートカードを作らなければなりません。マレーシアにある普通の大学図書館では、一つの広い閲覧室があり、その閲覧室の壁に沿って本棚が並べられています。図書館にある本や雑誌などは、スマートカードを使って借りることができます。

図書館にはたくさんの専門書が置いてあるので、図書館を利用して研究する人は大変満足をしているようです。また、図書館には、読み物だけでなく、パソコンやテレビなども置いてあります。学生以外の人もこの図書館を利用することができるので、週末には多くの人を訪れます。



留学生が紹介する外国の図書館 2

ベトナムの図書館について

電気情報工学科 3年

チエン



私はベトナムから来ました。チエンと言います。ベトナムにいた時は一年半ダーナン大学で勉強していたのですが、ここでその大学の図書館についてお話ししたいと思います。

まず、ダーナン大学の一員であれば図書館カードを作ることができます。毎月図書館費をきちんと払って図書館カードを持っている学生は図書館を使えることになっています。図書館費というのは電気代で図書館を使っている皆が払うお金ということです。その図書館は4階建てで、1階はパソコンを使うところになっています。インターネットはもちろんできるし、いろいろなソフトウェア

も用意しています。設立当初、全て最新のパソコンだったので、学生は皆喜びました。インターネットから探したドキュメントはここで印刷することもできます。

2階へ上がると数えられないほど様々な種類の沢山の本が置いてあります。そんな本は借りて持ち帰ってもいいし、そこで読んだ後、返してもいいです。それ以外、情報を勉強したい人は本を読みながら2階にあるパソコンを使って実行してすることができます。外国語を勉強したい人はここにあるCDを持って行って、3階にある専門的な部屋で学ぶことができます。この3階ではそれ以外、いろいろ専門的な部屋があります。討論部屋やグループで一緒に勉強する部屋などです。それにここでは雑誌と新聞も置いていて、読みたい人が自由に読めます。勉強の後、疲れた人用に、リラクスのところも設定する。お腹が空いた人には4階に食堂があります。食べ物や飲み物を販売しています。

便利でしょう？興味を持たれたら、是非ベトナムに行かれたときに図書館に立ち寄ってみてください。

ブックハンティングについて

文化委員長

建築学科4年

梅比良 友美



まず、ブックハンティングとは年に1回学生が図書館にいたい本を自由に選ぶことのできる行事だ。各クラスから1人ずつ参加し、今年はエールエールのジュンク堂で本を選んだ。予算は1人1万円です。いつもは躊躇してしまうような専門書でも買うことができる。ジャンルは小説・専門書・伝記など様々だ。自分が読みたかった本・人に読んでもらいたいお勧めの本を図書館に入れることができる。

各クラス1人しか参加できないので、参加したくても参加できない学生は参加する学生に頼んでみるといいと思う。そうすることで、よりたくさん種類の本が図書館に入ることになるだろう。本を選ぶ時間は1時間ちょっとでしかもジュンク堂はとても広いので自分が欲しいと思っている本の題名や著者・その本が図書館にあるかどうかは調べておくほうがいいだろう。そうすると時間を有効に使えるし他におもしろそうな本が見つかるかもしれない。

最近では、携帯電話で本を読むことができる携帯小説が流行っている。たしかに携帯電話で読むことは手軽で便利だ。しかし、バリエーションが乏しく、ワンパターンなものが多い。そこで、実際に本を手にとって読んでみるのもいいかもしれない。

ブックハンティングはここ最近、前期期末テストの最終日に行われている。疲れや寝不足でつらいかもしれないが、直接本に触れることのできるいい機会なのでたくさんの人に積極的に参加してほしい。



ブックハンティング

第6回呉高専文化セミナー

図書館長補

寺岡 勝



平成20年7月27日(日)、大和ミュージアム4階会議室において、本校図書館主催による第6回呉高専文化セミナーが開催された。

講師は本校一般科目講師の栗原武士氏で、演題はすこぶる親しみやすい「旅するアメリカ～移住と移動の文化をめぐって～」であった。当日は酷暑であったが、知的好奇心旺盛な市民の方が多数参加された。参加者の中には、7月5日、12日の両土曜日に開催された市民公開講座「現代アメリカを読む～文学・映画とアメリカ社会～」にも参加された栗原先生ファンの市民の方も数人おられた。

セミナーでは、カラー写真を多用した10ページにわたる資料が事前に配られ、パワーポイント・音声付映像を多用した講演が行われ、栗原先生の流暢な英語に誘いこまれて時間のたつのも忘れて聞き入った。講演要旨は、アメリカ社会そのものが人々の移住と移動によって形成されてきたこと、そして移住と移動によって新天地を求めるアメリカ人の精神が、アメリカの文学や映画において頻繁に描かれていることを示すものであった。講演後は、栗原先生のファンと思しきアメリカ文化に一言持つ参加者から質問もあり、盛況と言える講演であった。



文化セミナー講演

新任教員の随想 1

本を読めとは言わない



一般科目

岩城 裕之



人間は不思議なもので（あまのじゃくな私は、というべきか）「やるな」といわれたことに限って、どうしてもやりたくなるものだ。禁を犯す緊張感とダークな世界に感じる大人の味が楽しいのだ。もちろん、警察のお世話になるような「悪」ではいけないが…

だから、読書をしなさいと言われるとしたくなくなる。勉強しなさい、も同じ。勉強しなさいと言われるれば言われるほど、バイト（仕事）をしたくなったり、遊びなくなったりするのだろう。普段掃除なんかしていないのに、試験前になると突然部屋の大掃除をしたくなるという経験はあるのではないだろうか。

そこで、ぜひ想像してみてください。授業で先生が言うのだ。「もっと真剣に遊びなさい」と注意している姿。「もっと真剣に、ケータイメールを打て！」などなど。それで成績をつけられるとどうだろうか。もしかして、それで留年したりして。理由は「ゲームに取り組む真剣さが足りない」。ウザい、ってとこか。

やはり、やれと言われるとやりたくなるのではないだろうか。

さて、方言調査で広島県のある島に出かけた時のこと。出会った九十過ぎのおばあさんが、こんな話をしてくれた。「わしは天皇に感謝しとるんよ」。何のことかわからなかったが、こういうことのように。「天皇陛下が尋常小学校を作って、義務教育になったけー、わしのような者でも勉強できたんじゃ。それがなかったら、仕事せー、仕事せー言われて、学校なんか行かれんかった」と。その上「学校に行ったおかげで本が読める。これが幸せなんじゃ」と。

なるほど。勉強できるという幸せを天皇に感謝しているわけだ。感謝する相手が天皇であることの是非は別にして、ここにも仕事しろと言われると勉強したくなるという心理が明らかだ。

それにしても、かつて本を読むことや勉強することを良しとしない時代があった。庶民にとって、読書や勉強よりも、早くから仕事をするのが美德だったのだ。そういえば、スクールの語源はギリシア語のスコレー skhole(余暇、ひま)だと聞いたことがある。

読書しろ、勉強しろと言われる今の時代はなんて幸せなのだろう。

そういうわけで、読書しろとは言わない。ただ、2点だけ考えてみてほしい。

歴史的に見ても、庶民がこのような幸せを手に入れたことは少ない。このような時代状況を、どう考え、どう使うかが問題だろう。これが1点目。

次に、読書は所詮、余暇を楽しむもの。難しく考えないでいいのだ。気楽に本を手にはすればよい。これが、不真面目な読書。

最後に、私の読書傾向だが、大体において暗いと言われる。暗いというよりも、現世から離れてしまっているかんじか。作家では、日野啓三などがおすすめ。普段明るく生きようとすると、暗い世界が不足する。本の中で出会い、一人酔い、「オレはダークだ」などと思って、さらに酔って…とまあ、夜な夜な一種の変身をしている。（気持ち悪いとか言うな！）したがって、これが「まじめな」読書であるはずがない。

ぜひ、すてきな余暇時間を。



読書は苦手という方へ

恥ずかしながら告白すると、私は文章を読むのも書くのも苦手でした。国語の成績は芳しくなく、苦手意識は助長され、勉強に身が入らないから成績は上がらない。小学生の時には「国語は苦手」の悪循環が出来上がっていました。そのためか、高校生までは読書を敬遠しがちでした。

一方、数学は好きだったので、大学では数学を専攻しました。高校生までに習った数学は、さらに抽象化・細分化されていきます。学年が進むにつれて、授業の内容はどんどん難しくなりました。理解できないところをどうにか補えないかと、大学の図書館や書籍部に通うことが多くなりました。大学の書籍部には、数学の専門書の他に、現代数学を一般向けに解説した本、数学者のエッセイ・伝記などが置いてあります。専門書は高価でなかなか手が出ませんでした。一般向けの安価な本で面白そうな本は、買って読むようになりました。

読書が楽しいと思えるようになったのは、この頃からです。高校生までは「本を読むことは大切だ」という考えが先行し、本を読むために読書をしようとしていました。興味があることを知りたいと欲すれば、自然と本に手が出たのです。

何冊か本を読んでいくと、次々と読みたい本が増えていきます。アメリカでの初めての留学体験を綴った『若き数学者のアメリカ』（藤原正彦、新潮文庫）が面白く、他の藤原氏の著作に興味を持ち、また、その中で紹介されている『怠け数学者の記』（小平邦彦、岩波現代文庫）や『ある数学者の生涯と弁明』（ハーディー、シュプリンガー・フェアラー・ク東京）が気になって読んでみると、これらもまた面白い。大学の帰りに書籍部に寄っては他に面白い本はないかと、店内を散策しました。



一般科目
(数学)

山内 貴光



散策をしているうちに、数学に関係している数学以外の本も目に入ってきます。例えば、『無限論の教室』（野矢茂樹、講談社現代新書）、小説風に書かれた無限論（哲学）の入門書です。数学では、無限にある「数」全体を集めて一つの集合とし、議論をします。この本に登場するタジマ先生は、無限にあるものを集合とする「実無限」の立場を説明しながらも、無限に集めたものは、存在しないとする「可能無限」の立場に立ちます。私は可能無限の立場に立とうとは思いませんでしたが、ゲーデルの不完全性定理（大雑把にいうと「自然数を使うような数学の理論には、正しいか間違っているか証明できない命題がある」という恐ろしい定理）についての解説もあり、興味深くこの本を読みました。

また、それまで読むことが少なかった文芸書にも興味が出てきました。そのきっかけになったのが、『博士の愛した数式』（小川洋子、新潮社）です。大学院に進んだものの、博士論文のための結果が出ずに鬱々としていたときに出会った本です。記憶が80分しか持たない博士と家政婦、そして家政婦の息子「ルート」が数学を楽しむ姿から元気をもらいました。

本を読むスピードは相変わらず遅く、（この文を含めて）文章を書く苦手意識は依然残ったままですが、いつの間にか読書に対する抵抗は全くななくなっていました。

読書を通して、様々な考え・言葉・知識に出会うことができます。但し、そのような読書の大切さ・楽しさを実感するためには、ある程度の量の本を読むことが必要だと思います。私の場合は、趣味のあった数学のおかげで、たくさんの本に出会うことができ、興味を広げることができました。

最近では、時間に余裕があると書店や図書館に赴きます。アンテナを張りながら目的もなく歩いていると、面白そうな本が目に入ってきます。さて、今回はどんな本に出会えるのでしょうか。

私の読書歴



一般科目
(数学)

原本 博史



小学校高学年のころに三国志にとりつかれ、以来三国志に関連する本や漫画、解説書を読みまわりました。読む本分野に偏りはあるものの、この頃から本を読むことが好きになっていきました。

17歳のとき、ふと「一年間に何冊本が読めるのか」疑問に思い、ジャンルを制限せずにたくさん本を読むことに挑戦しました。無目的にやっても続かないと思い、(1) 読んだ本の題名と読み終わった日を記録する、(2) 無理に内容を覚えられない、(3) 途中で面白くないと思ったらその本を読むのを止める、というルールの下で取り組むことにしました。

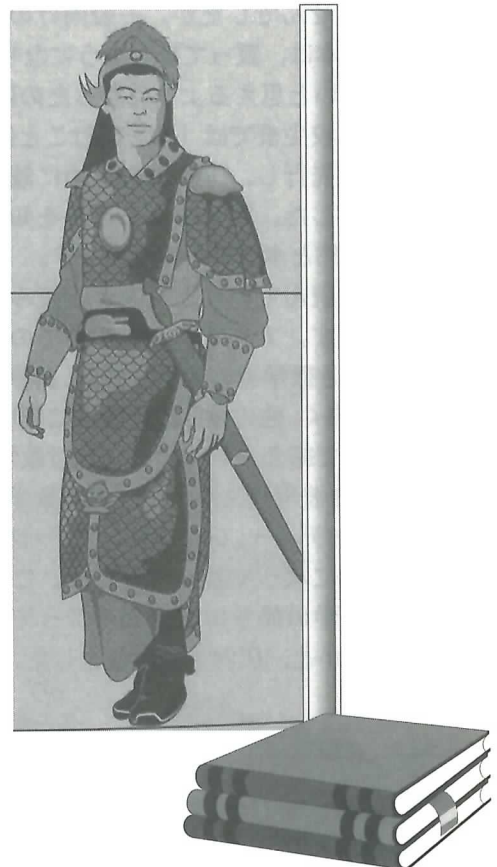
買うのはもちろん、図書館で借りたり、古本屋で安い文庫本を探したり、知り合いから譲ってもらったり、様々な方法で本を手元に集めて手当たり次第本を読んだ結果、一年間で読んだ本は130冊あまり。今振り返ると、寮生活で暇な時間が多かったとはいえ、これだけ本を読む余裕があったのだと、我がことながら驚きです。

冊数をこなすため、深く考えて読まなかった結果、ほとんどの本の内容は忘れてしまいました。そんな中でもやはり強く心に残るものがいくつかあり、定番の青春小説「車輪の下」、沢木耕太郎の紀行文「深夜特急」、中島敦の「山月記・李陵」、シャーロック・ホームズシリーズなどは、今でも時々面白い部分を拾い読みしています。何度読んでも面白く、またその面白さも読み返すたびに違ってきます。例えば山月記は、最初は漢文のような文章の響きに魅力を感じ、今では主人公の李徴の功名心と挫折の苦しみを、少し掘り下げて理解できるようになった気がしています。

面白さを感じなかった本や難しくて読めなかった本もありました。大抵は背伸びして自分の実力以上の本や、名著とよばれる本に挑戦して失敗する、というパターンです。一方で比較的リスクで、

自分の身の程を知り、及ぶことの出来ない広い世界があることを知るきっかけになったとも思っています。

先日、ある友達から「面白い本を紹介して」と言われました。学生の頃は本を読むこととは無縁だった友達ですが、偶然読んだ歴史小説(幕末もの)に惹かれ、最近では暇さえあれば本を読んでいるとのことでした。読書の魅力は、一度気付くとなかなか離れがたいものがあります。図書館に行けばたくさん本が置いてあります。皆さんにも多くの本にふれあう機会がたくさんあります。ぜひこのすばらしい魅力に、学生の間にとりつかれてほしいと考えています。



人生を変えた一冊



機械工学科

高津 康幸



著名人などが「人生を変えた一冊」を紹介しているのをよく見かけ、紹介されている本は、文学小説・推理小説あるいは啓蒙書など多岐にわたっている。「人生を変えた一冊」というのを要約すれば、読むことにより人生観に少なからず影響が及ぼされ、その後の人生が変わったということであろう。今回紹介する一冊は人生観には何ら変化はもたらされなかったものの、その後の人生が大きく変貌してしまったというエピソードについてしたためてみる。

その本にめぐり合ったのは、博士後期過程3年次の秋であったことを今でも鮮明に憶えている。その時の状況は、奨学金を頂いていた空調メーカーに内定し会社の内定式も済ませ、専攻内の博士論文内容の事前審査にもパスし博士論文を執筆している最中であつた。参考文献サーベイのため、いつものように図書館に立ち寄り、何気なく化学工学の書架を眺めていると少々古びた本に目が留まった。Slattery, J.C. 著 Momentum, Energy, and Mass Transfer in Continua(連続体における運動量・エネルギーおよび物質移動)という本で、はじめは化学工学分野で名著と誉れの高い Bird, R.B, Stewart, W.E. & Lightfoot, E.N. 著 Transport Phenomena(輸送現象)と同じような本であろうと当たりを付けて斜め読みをしてみると、本の構成自体は同じようなものであるが、Local Volume Averaging(局所体積平均)という記述が何かしら気にかかる。早速借りて読んでみると、博士論文執筆中という状況そっこのけで Local Volume Averaging(局所体積平均)という概念にのめりこんでしまい、新たな研究テーマを模索し始めてしまった。博士論文の最終段階でこのようなことをすると、指導教官から“他の事に目を奪われず寸暇を惜しんで論文を仕上げなさい”などとお小言の一つや二つもらうのが当然であろうが、当時の指導教官は出来た人物で“君は面白いことをやっているな”の一言で新たな研究を続けさせて頂いたことには、

今でも心底感謝している。

自業自得であるが、Slatteryの本に記述されていた Local Volume Averaging(局所体積平均)の概念を用いた研究テーマ“多孔質内乱流モデル”の素案ができたのはクリスマス・イブのことであり、すぐに学会に論文投稿しても採択されるまで最低でも半年は掛かってしまい、年度内に博士後期過程修了するという目標は潰れてしまった。失意のうち冷静に状況を鑑みると、来春修了できないため内定している会社に多大な迷惑をかけることになり、取り返しがつかないことをしでかしたと後悔したものである。意を決して、指導教官の部屋に赴き、“博士後期過程をもう1年やらせてください”とお願いすると、快く了承して頂くとともに、“次年度は教官として大学に残らないか”という予期せぬ提案まで賜り、恩師のご厚情に謝したことは生涯忘れることは無いであろう。その後、恩師のご奔走により、内定していた会社とも円満解決し、研究者としての道を歩むことになった。

時々、Slattery, J.C. 著 Momentum, Energy, and Mass Transfer in Continuaに出会っていないければ、今頃何をしているのだろうかなどと取留めもないことを考えてしまう。もちろん、恩師との出会いなくして現在の自分はなく、研究という世界に導き新たな人生を歩ませてくれたことに心より感謝している。ただ、Slatteryの本との出会いは、人生を変えるきっかけとなっており、忘れられない一冊である。

その後、Slattery, J.C. 著 Momentum, Energy, and Mass Transfer in Continuaを入手しようと、国内外のいろいろな本屋に注文したが、すでに絶版になっており、現在まで入手にはいたっていない。Slattery, J.C. 著 Advanced Transport Phenomenaがほぼ同じ内容で出版され現在入手できるが、やはり Momentum, Energy, and Mass Transfer in Continuaを古本でも手元におきたく、ノスタルジーに駆られ古本屋を訪ねることがある。

本と出会い



建築学科

下倉 玲子



好きな本は？と聞かれて真先に答えるのは、宮本輝の「ここに地終わり 海始まる」です。大学時代にアルバイト友達の家遊びに行った時に借りて帰った本です。未だ私の手元にあります。借りた本は返しましたが、後に購入したからです。

他には？と聞かれたら、山崎豊子「白い巨塔」、桐野夏生「OUT」、京極夏彦「絡新婦の理」、三谷幸喜、清水ミチコ「むかつく二人」、村上春樹「ねじまき鳥クロニクル」・・・。

挙げてみれば、自分で探し出した本より人から面白いと聞き借りた方が多いことに気がつきます。もちろん自分でも結構購入していますよ！ただ、印象に残るのは借りた本なのでしょう。持ち主の御墨付の一冊ですし、本を返す時に必ず、ここがよかった、ここで泣いた、あの登場人物はかっこいい、など話しますからね。面白さが何倍にも膨らみ、受け止め方が人により違うこともわかります。

本の借り方は二通り。一つは、友達や後輩が面白そうに読んでいる本に私が興味を示し借りる場合。もう一つは、これ面白いから読んでみてと強引に薦められ借りる場合。

後者の場合は大変です。薦められた以上、自分の好みに関わらず読むしかありません。持ち主は本の魅力を伝えたい相当の読書家です。そして残念ながら読書家は、現代を舞台にした読みやすい恋愛小説なんて持ってきてはくれず、古典的、オカルト的で難しい文章の小説や複雑な推理小説を次から次へと。一人で本屋に行ったら絶対手にならない、買わない本ばかり。

しかし、スローリーダーと思われるのは嫌なので、というより、借りている間その本の魅力を持ち主がしつこく話してくるので、我慢して読みました。不思議なことに、1冊目はやっぱり苦手と思っていたものが、2冊目はちょっと面白いかも、3冊目は結構好きかも、・・・とだんだんと適応してくるのです。最終的には自ら似たような本を購入するように。

新たな人との出会いは、新たな本との出会い、新たな自分との出会いでもある。本を読む行為自体は内なる作業であるけれど、本の内容を人と共有することは、とても社交的な気がしませんか。

社交界にマナーはつきもの。友達からでも、図書館からでも、本を借りた場合は借りた時と同じ状態で返さなくてはなりません。がさつな私は細心の注意を払ってやっと人並なので、借りた本にまず包装紙やコピー用紙などでカバーをかけます。そしてカバンに入れて持ち歩く時は、更にビニール袋に入れます。お菓子を食べながら読みません。涙が流れてしまった時は仰向けになって読みます（これはウソ）。万が一、汚してしまったら返しません（これもウソ。ちゃんと謝って返します）。借りた物をぞんざいに扱うことは、持ち主をぞんざいに扱うことと同等です。

本の貸し借りの話ではないですが、大学時代、研究室でこんなことがありました。ある学生が後輩に頼まれてイギリスのロックバンド QUEEN のCDを貸しました。数日後、貸した方の学生は、後輩の机を見てショックを受けます。自分の大切なCDが剥き出しのままボンと置かれていたからです。後輩にとっては全く悪気はなく、自分の物と同じように借り物も扱っているだけです。しかし、知らず知らず人に傷つけてしまっている。持ち主が剥き出しのCDを見てどう思うか想像できなかつたのです。

生きている間に経験できることは限られます。しかし、本は数時間でロンドンやニューヨーク、宇宙にまで連れて行ってくれます。本の中でなら、医者、ミュージシャン、キャビンアテンダント、どんな憧れの職業にも就くことができます。また、本当に理解できることは少しかもしれませんが、生活貧困者、身体障害者、戦争体験者の気持ちも知ることができます。

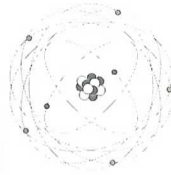
本を読むことで想像力を養って下さい。そして、人と話し、本を通じて人の輪を広げて下さい。人から借りる場合はマナーを忘れずに。

新着図書 6選

アドバンスング物理 A 2

オグボーン／M. ホワイトハウス 編

笠 耐／西川 恭治／覧具 博義 監訳



一般科目

笠井 聖二



この本は、イギリスで開発された高等学校用の物理コース「アドバンスング物理」(Advancing Physics)のテキストです。テキストといっても、日本の物理の教科書とは全然違い、図・絵・写真が豊富で、高校生向けの科学雑誌のような感じです。皆さんには、まずは気軽にこの本を手に取り、パラパラと内容を眺めてもらいたいと思います。

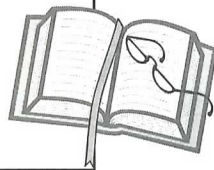
「アドバンスング物理」は、今回紹介するA2と、もうひとつASの2部で構成されています。ASの方がより基礎的な内容となっていますが、両方とも、科学的な好奇心を刺激しながら物理の内容を勉強するように考えられています。自分の興味にあわせ、AS・A2の両方を読むとよいでしょう(ASも、図書館にあります)。

当然、小説などとは違いますから、物理の理解度により、少し読む工夫が必要かもしれません。低学年では、細かいところにとらわれずに、物理の世界や考え方に親しむために読むとよいと思います。高学年では、自分が勉強した内容を思い出しながら、内容を少し丁寧に読むとよいでしょう。また、専攻科生は、内容だけではなく、各章の関連や構成に注意しながら、本を書いた人達の意図をくみ取るように読んでみて下さい。授業での勉強はコマ切れですが、自然はいろいろなことが絡み合い関係しています。この本を読みながら、俯瞰的に物理を見渡し理解することを試みるとよいと思います。

A2は、宇宙や素粒子について説明されています。多くの学生が興味を持つ内容だと思えます。本当の物理のおもしろさを感じることができる、お勧めの本です。

あさきゆめみし

大和和紀 著
講談社漫画文庫

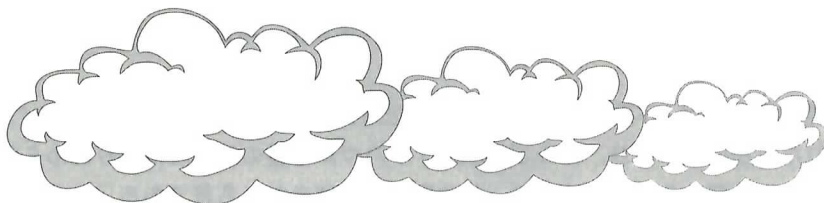


一般科目

小助川 元太



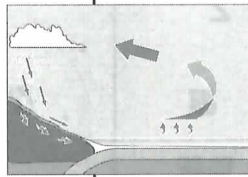
図書館に漫画を入れるとは何ごとか!と叱られそうだが、この『あさきゆめみし』、ただの漫画ではない。実はあの『源氏物語』を漫画化したもので、内容もしっかりしており、『源氏物語』を知るには恰好の入門書といえる。授業で読んで興味を持ったので、もっと読んでみたいと思った人にはお薦めだ。2008年は源氏物語誕生1000年紀ということで、さまざまなメディアで話題になったが、それは『源氏物語』が日本を代表する文学だからである。世界に知られる日本古典文学の最高傑作のストーリーを簡単に知ることができるというだけでも、読む価値はある。



流れの可視化入門

可視化情報学会編

朝倉書店



機械工学科

高津 康幸



ポンプ・圧縮機・水車などの流体機械あるいはボイラー・熱交換器・ヒートパイプなどの熱機器には、作動流体として水や空気などが用いられます。水や空気は我々の身近にあるもので、無色透明なものです。無色透明であるということは少し厄介で、そのままでは流れを見ることはできません。例えば、そよ風が吹いているとします。そよ風がどのように吹いているか見れますか？そよ風を皮膚で体感できても、そよ風の流れは見ることはできないと思います。それでは、タンポポ畑でタンポポの綿帽子が風に舞っている光景を思い浮かべてください。そよ風だと綿帽子はゆらゆらと揺らめき、強い風が吹くと綿帽子は遠くまで飛ばされてしまいます。我々は、タンポポの綿帽子の動きから、風の流れを観察することができます。この観察法は、トレーサー法と呼ばれる流れの可視化手法です。

本書では、自動車・新幹線まわりの流れをはじめ、トンボの羽ばたきによって生じる流れ、昨年のオリンピック水泳で話題となった水着に関連するような人体まわりの水流など、様々な流れの可視化方法について解りやすく解説されており、多数掲載された流れの写真ギャラリーを眺めるだけでも楽しめます。是非とも一度手にとってみてください。

ゴッホが1889年に描いた「星月夜」（ニューヨーク近代美術館所蔵）という絵画があります。この絵を見たことがある人は知っていると思いますが、大きな渦のようなものが描かれています。最初見たときには絵画のすばらしさに感動はしたものの、果たして夜に渦など見えるのかなどと釈然としない気がしたものです。その後、NASAのハッブル宇宙望遠鏡が、ゴッホの「星月夜」のような、数兆キロメートルの範囲に渦巻く美しいちりのようなすを捉えたニュースに接した際には、正直驚きました。偉人には、特別な可視化手法を用いなくても、夜でも渦が見えるのかもしれませんが。

通信工学通論

畔柳 功芳・塩谷 光 著

コロナ社



電気情報工学科

黒木 太司



昨今の通信技術の発展は、とどまるところを知らず、毎年の如く新しい通信方式や回路技術が実用化されている。本書はこのような分野を目指す学生諸君のために執筆された通信工学全般にわたる入門書である。

通信とは人間の五感の一部を電気信号に変換し、これを効率よく“いつでも、どこでも、だれとでも”伝達し合う技術であり、本書ではまず「聞く」および「見る」という人間の感覚を科学的に解説し、それをいかに電気信号に換えるが詳述されている。

またこの電気信号を、アナログおよびデジタル信号形式で変復調、多重化、中継する方式を解説し、その有線および無線伝送方式を言及している。

著者の畔柳氏は日本電信電話公社（現NTT）でデジタル多重伝送方式を、また塩谷氏は日本電気（現NEC）で衛星通信方式をそれぞれ開発された実務経験があり、そのご経験やノウハウが本書の至る所に散りばめられている。

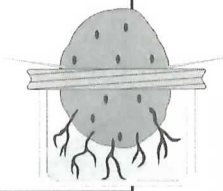
将来通信分野で活躍することを希望する学生諸君には、是非熟読して頂きたい名著である。

ミトコンドリアが進化を決めた

ニックレーン 著

斉藤 隆央 訳

みすず書房



環境都市工学科

及川 栄作



生物進化の機転となったのは生物のどの器官が重要なのだろうか？これまで生物がダイナミックに進化したと考えられているのは、植物において葉緑体が非光合成性細菌の一種を光合成細菌の藍藻類を取り込むことで生まれたことであり、また動植物などの真核生物（核のある生物）細胞においては、ミトコンドリアがある微生物細胞が別の微生物細胞を取り込むことで生まれたことであると考えられている。この度紹介する本は後者の生体の発電所とも言われるミトコンドリアが最も生物進化に重要であるという説を唱えた本で、ニック・レーン著の「ミトコンドリアが進化を決めた」である。

ここで、生物がエネルギーを作り出す主要な3つの方法をあげると、光合成等の光エネルギーを変換する方法、有機物（基質）を分解する過程で作りに出す方法、細胞膜やミトコンドリア膜の H^+ イオンの流入に伴う濃度勾配（プロトン駆動力）をエネルギーとして用いる方法の3つがある。この本は3つ目の H^+ イオンが関連したミトコンドリアが生物の進化に重要であったという説を唱えた本である。余談だが、排水処理は微生物がエネルギー獲得のために行う活動そのものであり、これらは私の講義でも取り上げている。私がこの本を手にしたのは、これだけの理由ではない。バイオ分野に微生物電池という技術があり、実はこの技術はミトコンドリアと同じ働きを行う、どこにでもいる微生物が行っている水素イオンの細胞からの出し入れと伴に、細胞膜で生じる水素化酵素と脱水素酵素（酸化還元反応）による水素イオンの脱着で発生する電子 e^- を蓄えた電池である（通常電子は回収しなければ O_2 に渡され水になる）。このような微生物を応用した発電の研究が進み始めており、私がバイオ分野の研究に入った理由の一つは微生物による発電を実用化させたいと考えたからである。応用技術を開発するためには、基になる現象や原理を良く理解しておくことが重要である。特に生物を応用した技術開発では分子レベルでの反応メカニズムの理解も必要である。生物進化とエネルギー生産の関係を理解しなければ微生物電池の開発もできないのである。

ル・コルビュジェ事典

ジャック・リュカン 監修

加藤 邦男 監訳

中央公論美術出版



建築学科

寺岡 勝



本書は、「諸芸術の統合」を主張し、また己の職業を建築家、都市計画家、詩人、哲学者のいずれでもあることを自認していた「ル・コルビュジェ」についての事典である。A4版で、6百数十頁におよぶ大著である。原著は61名の建築史・都市論・建築論の専門家たちが、ル・コルビュジェの生涯の業績や作品の由来とその意味などを、142項目について執筆している。

本書は、図、絵、写真が豊富で、建築の初心者でも気軽に眺めることができます。「建築とは何だろうか」と興味を持つ者にとって有用であるし、また諸芸術に興味を懐いている学生にも有用であると思われます。少し興味を持った事項については、本格的な解説が付いており、専門家の気分になって読み解くことができます。

かつて私が本校の学生であった時、ル・コルビュジェ著「伽藍が白かったとき」（岩波書店）のタイトルだけに興味をもち、読んで感銘を受けたことを思い出す。ル・コルビュジェは、「家は住居機械である」と言い、併せて「建築はすぐれて芸術である。建築は功利的なものに彼方にある。建築とは人を感動させる比例を定立することである。無生の石でドラマをつくり出すことである」とも言う。西洋思潮の二つの大きな流れ、古典的とロマン的がル・コルビュジェにおいてほどよく交錯し合い、その融合を作品に具現している。

本書「ル・コルビュジェ事典」は、初心者から本格的に建築を目指す者にとって有用であり、多くの学生に一度は手に取って眺めてほしい本である。

図書貸出し回数上位8

前期における貸出し回数の多い1位、2位、3位の表紙および1～8位までの図書のタイトルを表2に示します。



表2 図書貸出し回数上位8

順位	タイトル	順位	タイトル
1	最短で結果が出る超勉強法	5	図書館革命
2	図書館戦争	5	Googleの裏技・便利技
3	ホームレス中学生	7	図書館危機
4	図書館内乱	7	実力をつける物理

お知らせ

学年末休業中の長期貸出

右記のように、長期貸出を行ないます。貸出中の図書は、継続手続（1回だけ可）を行なえば、長期貸出の扱いとなります。

貸出期間	1～4年生 2月18日～3月23日 専攻科1年 2月6日～3月23日
貸出冊数	5冊以内（雑誌は除く）
返却期限	4月7日（日） 厳守

延滞図書返却について

貸出期限が過ぎて督促しても一向に返さない学生がいます。皆が利用する本です。紛失したら図書館までご連絡ください。弁償していただきます。3月卒業予定者は、期限までに必ず返却してください。

編集後記

“図書だより第48号”は、いかがでしたでしょうか？ “図書だより”を読んで、図書館へ行ってみようと思う方々が増えると嬉しいですね。

文芸部の発案により「文芸部」のコーナーができました。できたばかりですが、これから色々工夫して楽しいディスプレイをしてくれることを期待しています。

最後に、今号の発刊にあたりご多忙にも関わらず原稿を執筆していただきました方々に心からお礼申し上げます。
(図書館)

